ペルー・アンデスの口頭伝承
――十字架――

青木芳夫

一　はじめに

今日のペルーでは、他のラテンアメリカ諸国とおなじように、人々の九割が、公式にはキリスト教徒（カトリック教徒）に分類される。スペイン人コンキスタドールの一人ピサロによって、一五三二年、この地を中心に繁栄を誇っていたインカ帝国は滅ぼされた。スペインによるこの征服事業は、たんなる軍事的政治的征服だけではなく、社会経済的征服、さらには精神的文化的征服つまりキリスト教化（カトリック化）を意味した。「偶像破壊運動」によって知られるこのキリスト教化の名のもとに、ペルーの伝統的な宗教や信仰は徹底的に弾圧された。植民地期ペルーの人々は、洗礼を受け、形式的にはカトリック教徒へと改宗した。しかしながら、伝統的な宗教や信仰が根絶やしになったわけではなかった。それらは、形を変えて生き残っている。「フォーク・カトリシズム」として知られるシンクレティズム現象の多くがそれである。

しかし、シンクレティズムというのは、キリスト教と伝統的宗教という二つの要素のたんなる混淆を意味するのではない。両者はせめぎ合ってきたのであり――今もせめぎ合いは続いている――、それはカトリックへと適応しながら抵抗したペルーの人々による主体的営為の結実でもあった。たとえば、植民地体制がすでに定着した一七世紀になると、自ら積極的に「魔女」であると告白する先住民女性が現われるようになる。この意外な現象は、I・シルバー

ブラット[1]によって、次のように解釈されている。つまり、アンデスの伝統的な神々はすでに力を失ってしまった。しかし、キリスト教の洗礼を受けたにもかかわらず、キリストは自分たちには力を貸してくれない。残る道は、「悪魔」と互酬的な関係を結び、自分たちの神々の力を蘇らせることしかない、と。このようにキリスト教の教義を読み替え、神々を交換することによって、「魔女」たちは伝統的な宗教や信仰を実質的に存続させることに大きく貢献したのだった。

このようなキリスト教化と適応による抵抗との応酬は、植民地期の一回限りの現象ではけっしてなかった。それは、過去いくどとなく繰り返され、今日までも続く現象なのである。

本稿では、特に「十字架」を取り上げる。十字架について『広辞苑』第五版（一九九八年）は、次のように説明している。

「キリスト教徒が尊ぶ十字形のしるし。イエスが磔にされた記念、尊敬・名誉・犠牲・贖罪・苦難の表象、または礼拝の対象、また、装飾として用いる。」

このような標準的な十字架像が今日におけるペルー・アンデスの人々の中に皆無であるかといえば、けっしてそうではない。たとえば、クスコ地方の中学生を対象とした一九九四年のアンケート調査[2]では、「あなたは十字架についてどう考えますか？」という質問に対して、圧倒的多数の中学生が「キリストの死と犠牲」あるいは「キリスト・神・キリスト教」と答えている。しかし、「あなたはどの十字架を信仰しますか、またその理由は？」と問われると、同じ中学生の多くが「聖性・尊敬・愛・祈り」あるいは「キリストの架刑」という模範的な回答よりもむしろ「奇跡を起こすから」（福徳祈願的）と答えたのである。ペルー・アンデスの人々が抱く十字架像、あるいはそれを通してみた信仰の特徴を箇条書きするならば次の通りである、と筆者は現在考えている。

・十字架の擬人化
・歩く十字架・語る十字架
・人と十字架との間の互酬的関係――報いる神・罰する神――
・素材としての木、特に自然木の大切さ

これらの特徴は、キリスト教に由来するものというよりも、ペルー・アンデスの伝統的な宗教や信仰を反映するも

のである、と考えるべきだろう。

以下では、筆者が一九九四年にペルー・クスコ地方で地元の中学生から十字架について収集した口頭伝承を和訳し、紹介したい。先述したようなキリスト教化（征服の象徴としての十字架）と適応による抵抗（伝統的宗教の存続としての十字架）との間のせめぎ合いと、ペルー・アンデスの人々が抱いている十字架像の一端が、そこから読み取れるだろう。なお、角カッコ内は、インフォーマントの姓名とその中学校の所在地を表わす。

筆者の調査研究に協力してくださったクスコ市やウルバンバ町、ユカイ村に隣接するワイリャバンバ村、オリャンタイタンボ町［地図参照］の中学校の先生や生徒の皆様に、この紙面を借りて謝意を表する。また、口頭伝承の収集ならびに文字化[3]にあたっては、妻アンヘリカ・パロミーノの全面的な協力を得たことを記しておく。ペルー・アンデスにおける十字架像のさらなる分析については稿を改めたい。

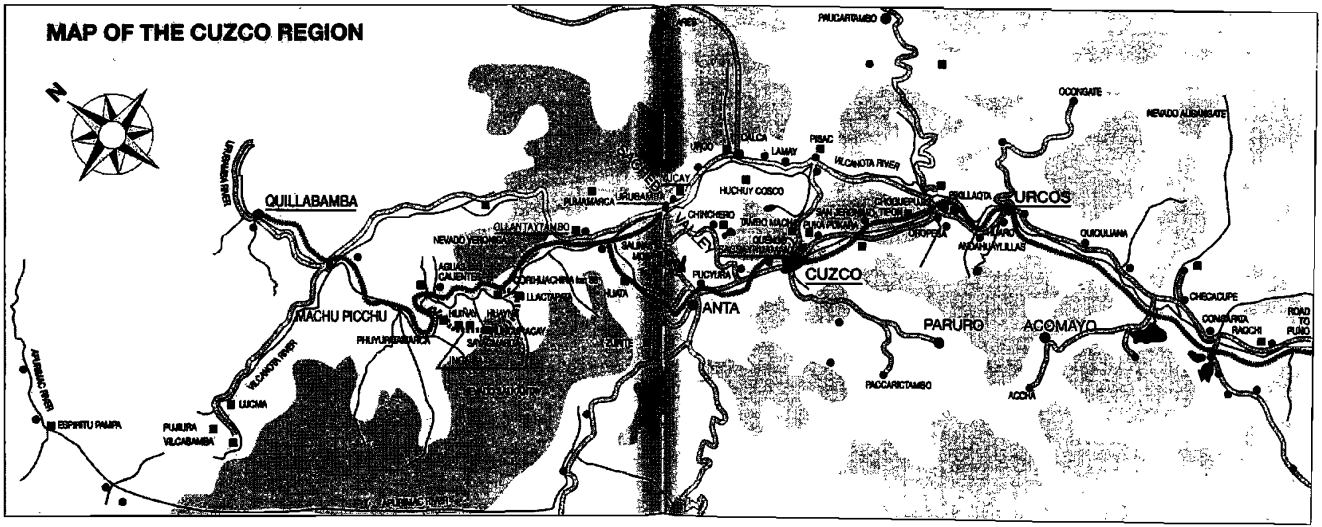
二　トレチャヨクの十字架

1　あるとき、身体の不自由な女性がトレチャヨクの教会[4]にやってきた。ロウソクで身体をこすり、懸命に祈ると、教会から歩いて出ることができた。［Karina Salas A., Urubamba］

2　トレチャヨクの神様がボリビアの鉱山に姿を現わした。そこでは、たくさんの人が働いていた。その鉱山の入口は厳重に警戒されていたのだが、そこの人々の目の前に現れると、もうすぐ落盤があるから逃げなさい、と言った。人々は本気にせず、彼が誰であるのか、どこからやってきたのか、そしてどこから入ったのか、と詰問した。そこで、彼はクスコのウルバンバの出身であること、トゥルプンク[5]というところの礼拝堂で暮らしていることを、伝えた。彼と一緒に何人かが出た途端に、落盤が起こり、本気にしなかった人々は犠牲になった。難を逃れた人々はトレチャヨクの神様を探しにやってきたが、驚いたことには、それは十字架であり、トレチャヨクの神様と呼ばれていることを知った。そこで、助けられたお礼に、盛大な祭りとミサを行なった。［María Antonieta Mora Atauchi, Urubamba］

3　トレチャヨクの神様は、警察官の恰好をした老人の姿で現れた。［Yony Díaz Arzubialde, Urubamba］

【地図】クスコ地方



出典：Alexandra Arellano & Neus Escandell-Tur, *All Cuzco*, 1998.
*文中に出てくる地名には下線を付した。

4　トレチャヨクの神様は奇跡を起こす。私のお父さんが病気になったとき、私は神様の肖像をそばに置いてお父さんの具合がよくなるようにお祈りをしたら、助けてくださった。[Mery Herrera Espinoza, Urubamba]

5　トレチャヨクの神様はクンカニ共同体の一人の農夫によってクンカニの渓流で発見された。そのあと農夫はみんなに、十字架のしるしを見たこと、十字架には警察官の顔があることを、知らせた。何日かがたってから、ウルバンバの司祭に知らせた。司祭は十字架を持ってくるように命じた。こうしてトレチャヨクの神様が出現し、今日ではウルバンバの住民によって崇められ、ウルバンバの正真正銘の守護神となっている。[María Villalobos, Urubamba]

6　トレチャヨクの十字架はもともとの十字架ではない。もともとの十字架はクンカニ谷から共同体のメンバーによって一九二〇年から二五年の頃に持ってこられた。ケウニャの自然木で、おおよそ長さ一メートル二〇くらいだったという。現在の十字架は取り替えられており、共同体のメンバーが持ってきたもともとの十字架ではない。[Hugo Zambrano Bocangel]

7　私の母が一度話してくれたことがある。母が子どもだったとき、ペドラサ某という狂人がウルバンバにいた。頭に石をぶつけて自分の母親を殺したから、狂人と思われていたのである。母がパン屋で働いていたとき、マッチを買いに出かけて、件の男と出会った。男が悪さをしようとすると、ふと苦みばしった警官が現れた。男は警官を見て逃げていった。そこで母は警官を追っかけてお

【写真1】警察官の恰好をした十字架

*ウルバンバ郡ユカイ村のクルスペラクイの祭りで

礼を言おうとしたが、もういなかった。姿が掻き消えてしまったそうである。その日から、母と同じように、私もまたおおいに信仰するようになった。[Yuri Meza Huaman, Urubamba]

8　畑に働きに行った農夫たちの話である。もう遅くなったので、帰る準備をしていた。するとそのとき、鋤がなにか木のようなものに当たった。掘ってみると、十字架であった。十字架はとても大きかったので、休み休み運んでいったが、道の中ほどに置いて、そこにトレチャヨク様の礼拝堂を建設することにした。[Wilbert Zuniga Escobedo & Silva Rivelino Pary, Urubamba]

9　ずっと昔、我らのトレチャヨク様は鍵がかかっていなかった。そのため、あるとき、教会から逃げ出し、ラレスパンパの方へ歩いていった。そこで一人の女性と出会った。彼女は挨拶をしたが、トレチャヨク様は返礼の仕方を知らず、また逃げ出した。とうとう、住民たちは教会に鍵をかけることにしたので、今にいたるまで教会におられるのである。[Jannet Rutty Gutiérrez Pelayo, Urubamba]

10　一八八六年頃、労働者の一団が、ハトゥンマルカ山[ケチュア語で、「大きな村」の意味]の麓のプマワンカ[ケチュア語で、「ピューマの岩」の意味]のあたりで美しい十字架を発見した。信仰心に突き動かされた彼らはウルバンバまで運ぼうとしたが、あまりの重さに耐えられず、道の途中に放って置くしかなかった。しかし、その夜、みんなが眠ってしまったとき、一人の夢の中に現れ、ウルバンバまで運ぶように伝えた。彼は仲間に話し、ウルバンバへと運んでいった。そこにトレチャヨクというお似合いの場所を見出した。そこは教会堂となり、そのとき以来今日まで、毎年祝われるようになった。[Percy Durand Escobar, Urubamba]

11　トレチャヨクの神様は高地のある村で発見された。一本の棒が地面に捨てられていたのをある男が見て、ウルバンバまで運んでこようとした。しかし、あまりに大きすぎたので、運べなかった。男は何人かの人を呼んできて運び、十字架の形にして命名した。そして、ウルバンバまで運んできた。[Florencia Ochoa Condori, Huayllabamba]

12　トレチャヨクの神様は、車が故障したカップルの前に顕現した。神様が車に触れると、車は直った。神様は、お金で支払われることを望まず、カップルが尋ねてくるように望んだ。[Daisy Mercado Vallenas, Cusco]

【写真２】トレチャヨクの教会堂

*ウルバンバ町にて

13　トレチャヨクの神様の十字架はウルバンバにあり、その場所にあった木でできている。だから、この十字架は非常に古くて、奇跡を起こす。[Edward Ortega, Cusco]

14　トレチャヨクの神様は警官だったという。ボリビアで暮らしていたが、ある指示を残して姿をくらました。ある日、一人の農夫が降りていってクンカニで十字架に遭遇した。驚いた彼はみんなに知らせに降りていった。みんなで見ると、それは非常に大きな十字架だった。ボリビアの人々がこのことを知って見に来た。トレチャヨクだと確認した。そこで、みんなは藁葺きの教会堂へと十字架を運んでいき、そのとき以来信仰するようになった。[Marisol Vargas Montañez & Narda Y. Oraica Gamboa, Urubamba]

三　チョケキルカの十字架

15　ある日、チョケキルカの神様がビルカノタ川の岸に現れた。漁師たちがそれを見て、引き上げ、教会には持っていかずに、チャカチンパで保管していた。やがて、この奇跡を起こす十字架を記念すべき日に祝福するために、教会の中にずっと置いておくことになった。この十字架は川の渦の中で発見された。[José Alfredo Mestas A., Ollantaytambo]

16　チョケキルカの神様の十字架はオリャンタイタンボの鉄道駅のもっと上流の渦の中で発見されたという。一人の老人の話では、彼が薪を取りに行ったとき、下を見る

と、驚いたことに、十字架が渦の中で回転していた。老人は縄で引っ張り上げようとして、岩の下に止めておいた。夜になって、彼の前に一人の警官が現れ、私の名前はマリアノ・チョケだと言った。[Celestino Ocon H., Ollantaytambo]

17　この十字架はビルカノタ川の渦の中で発見された。渦の上に一本の道が通っていて、一人の男がそこを通りかかったときに、川に十字架が浮かんでいるのを見た。家に帰り、人々を連れてきて、縄で引っ張り上げた。それから自分たちの村に運んでいき、十字架のためにロウソクをあげた。しかし、不注意から、十字架の下のほうが焦げた。そこで、十字架を他の場所に移した。今では、そこにずっといる。アラカマという。[Elizabeth Rodríguez Valle, Ollantaytambo]

18　フリオ・エスコベドという人がビルカノタ川の渦の辺りを馬で進んでいたという。その夜、誰かが呼ぶので、川のほうへ降りていって、十字架を発見した。[Sonia Guaman Sequeiros, Ollantaytambo]

19　十字架は最初湖で発見されたという。やがてその湖から姿を消して、ビルカノタ川の岸に現れた。最初は一人の男が見ただけだったが、あとで何人かで縄で引っ張り上げ、こうしてこの十字架は発見された。この十字架は木製で、非常に奇跡を起こす。オリャンタイタンボの村はこの十字架を信仰している。[Nilsa Linares C. & Rosauro Giraldo Ojeda, Ollantaytambo]

20　十字架はビルカノタ川で発見され、オリャンタイタンボへと運ばれた。十字架は渦の中で回転していて、一人の男の子がそれを見つけ、村へと知らせに行った。人々と神父が川から引っ張り上げ、教会へと運んだ。一人の夢の中に現れ、しっかり面倒を見ないならば、引越しするぞ、私にはもう二人の兄弟がいる、と伝えた。[Carlos Olivera Puma, Ollantaytambo]

四　その他の十字架

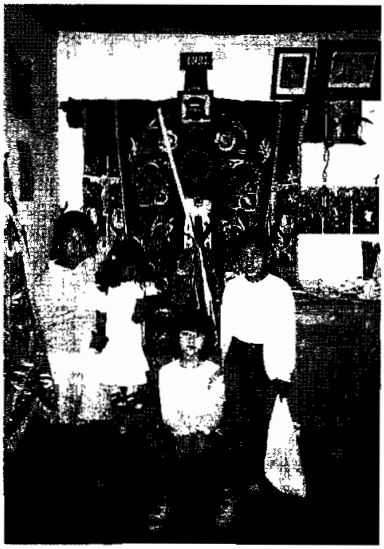
21　宣教師たちはいつもスマクパタ［ケチュア語で、「美しい高台」の意味］の場所に行っていたという。そのそばにある山がいまにも崩れそうなことに気がついた。そこで、宣教師たちは大きくて重い十字架を担いで山へ出かけ、そこに十字架を、心をこめて置き、一昼夜、自らを

鞭打ちながら過ごした。その十字架はミショネーロの十字架[7]と呼ばれる。[Hugo Moscoso, Yucay-Urubamba]

22 オリャンタイタンボのムニャイパタと呼ばれる場所に、昔々、一人の男の子がいた。彼は悪者たちに追いかけられ、走り疲れて、もう走れなくなった。へとへとになって岩に腰掛けていると、追跡者たちが見えてきた。間近に迫られたとき、男の子の姿が掻き消えた。岩が輝き、強く輝く光に満ちた。岩の真ん中には十字架の形が浮かび上がった。今でも見えるという。[Yenner Ochoa Riveros, Urubamba]

23 カルバリオ[8]の十字架の物語を話します。私の高祖父の

【写真3】ミショネーロの十字架



*ユカイ村のカルゲヨクの家で祀られている十字架

【写真4】カルバリオの十字架

*ユカイ村のカルバリオの十字架が盛装したところ

時代の一八九九年に、彼の前に十字架がカブラカンチャの山に現れた。そのとき以来今ではカルバリオ・モコ［モコとはケチュア語で、「こぶ」の意味。山の中腹にあっても、村の広場から見上げると、頂上のように見えることがある。］と呼ばれる場所である。そのとき以来、五月三日と七月一六日と七月二八日[9]には十字架を持って来て、お祭りをし、一週間以上も踊って祝っている。ミサやベラーダで信者たちが祝っている。［Juan Ferro Cusi, Chillca-Ollantaytambo］

24　マルカコーチャ［ケチュア語で、「村の湖」の意味］で一人の聖者の奇跡が現れたという。一人の牧者が羊を放牧していたとき、一人の子供が現れた。それはマルカコーチャの奇跡を起こす聖者だった。牧者の邪魔をしたという。小石を投げて邪魔をしたのだという。そこである日、一人の少女が羊の世話をしているときにも、その子供がマルカコーチャの小村に奇跡のように現れた。それは奇跡だった。［Cayetano Quispe Callizaya, Ollantaytambo］

25　サン・ファン・デ・ディオス［聖ファン］の神様はカルデロン・R・V博士のアシエンダの時代にマラガ峠から引っ越してきた。六月二四日[10]にアシエンダでお祝いをするためだった。このことは一九六四年のことであった。この十字架が奇跡を起こすことが知られるようになり、二、三年が経つと、踊りなどが現れ、村人たちが言うところによれば、キヤバンバの人々はこの神様のために戦争をしたがっていたので、是非にとタンカクのアシエンダにもって来たのだという。［Cayetano Quispe Callizaya, Ollantaytambo］

26　サン・ファンの神様について。はじめはマラガ峠にいて五月二二日にお祝いをしていた。二つの十字架があり、そこでその片方をタンカクの共同体に持って来て、六月二四日に祝うようになったのだという。というのは、タンカクの共同体は自分たちの十字架も守護聖人も持っていなかったので、自分たちのところへ持ってくるように望んでいたのだった。そのときから、毎年六月二四日には、カルゴ［祭主］を引き受けたり、踊り手の慣習を守ったり、ミサをあげたりするようになった。［Cristina Puclla Zavala, Tancac-Ollantaytambo］

27　ウィンピリャイの十字架[11]は、十字架の形をした自然の木で、奇跡を起こす。［Mauricio Rueda Velarde, Cusco］

28　テテカカ［サクサイワマンの近くの山］の神様の十字架

は岩に現れ、夢の中で一人の婦人にその顕現を告げた。[María Elena Salas Galindo, Cusco]

29　前に私が聞いたところでは、私の町（クルスパタ新区）に一本の十字架が現れた。あまりに突然で、たくさんの人が見に来たりお祈りをしに来たりした。[Guizela Ipenza Delgado, Cusco]

30　ウィンピリャイの神様について。ビバ・エル・ペルーの町［クスコ市のプエブロ・ホーベン、つまり新興地区の一つ］にある人が畑を持っていたという。畑の木々のうちで一本の木は十字架の形をしていた。その木を切ろうとした。その晩夢を見て、キリストが言った。「その木を切ってはならない。死んでしまうから。」男は本気にせず、木を切った。木は血を流し、数ヵ月後、農夫は死んでしまった。[Rodolfo Huamani Díaz, Cusco]

【写真５】自然の木の十字架

*ウルバンバ町の路傍で見かけた十字架

31　レコレッタの十字架について。[12] 三人の友達が賭けをしたという。最初に死んで地獄に落ちた者は、決まった日にレコレッタで二人を探そうというのだ。一人が死んだので、約束した日に生き残った二人は会ってレコレッタへ行った。火のついた車が二人に迫ってきたが、十字架にしがみついたら、無事だった。[Yojana Acuña, Cusco]

【写真６】レコレッタの十字架

五　ワンカ

32　私の祖父はよくワンカ[13]の神様について話してくれたものだ。あるとき、一人の牧者が羊の群れと一緒にサンサルバドールを通りかかったら、突然岩が輝きだすのを見た。何が起きたのか見ようと近づくと、そのとき十字架を運んでいる神様を見た。そこでそのあたりの人々に知らせに行き、見たことすべてを話した。人々が信じようとしなかったので、現場へと連れて行った。すると、人々も、ケチュア語でワンカという岩の中に、キリストの像と十字架を見たのだった。[Iván Estrada, Urubamba]

33　あるとき、ある家族がワンカへ旅行していた。そのとき、山崩れが起こった。その家族は祈った。山崩れで、彼らの車以外はみんな埋まってしまった。[I. D., Cusco]

34　その場所に近いアシエンダの農園主から逃亡してきた奴隷がいた。騎馬に追われた奴隷が洞窟の一つに隠れると、キリストが現れた。奴隷が助けてくれるように祈ると、追っ手たちに見つからずにすんだ。感謝した奴隷は、自分が隠れた洞窟の岩にキリストを描いた。[Rodrigo Aguayo Hermoza, Cusco]

【写真7】巡礼地ワンカ

※巡礼者たちは路傍の十字架にも石を積んでいく

35　あるとき、お金持ちがいた。彼の父は危篤状態だった。ある日、変哲もない一人の人が父を治してくれた。何でお支払いしたらよいでしょうか?と訊いた。私を探しなさい。ワンカで始まるところにいます。そこで、ワンカベリカ[ペルー南部のワンカベリカ県の県都]に行ってみたが、見つけられなかった。ワンカバンバ[ペルー北部のピウラ県の一地方]もだめだった。ついにあるところで彼の姿や肖像を発見し、ワンカの神様と呼んだ。[David Ugarte B., Cusco]

36　不治の病で重体だった一人の男の前に、ワンカの神様

が現れた。ワンカの神様は、彼の前に現れると、悪いところを直した。そこで、ワンカの神様は奇跡を起こすことが知れ渡った。[Cinthia Guillén, Cusco]

37 あるとき、一人の男の子が、ワンカ村の牧者の前に現れた。男の子はみすぼらしい身なりをしていた。それに似た着物を買ってくれるように、牧者にせがんだ。そのために、着物の端を切って、牧者に渡した。牧者はクスコ市に行って、そのような布を持っているか、と尋ねた。見ると、マントの布だった。[Guillermo A. Bejar Paz, Cusco]

38 失明した一人の男の物語である。男がワンカの神様の夢を見たとき、神様は、ある場所に行きなさい、そうすれば直るでしょう、と言った。そこで、翌日男が言われた場所に行ってみると、目が見えるようになった。[Marcela Caparó Salas, Cusco]

39 私が小さかった頃、私は転落した。ワンカの神様を深く信仰していた両親は、私を捧げるか何かした。それで、私は救われた。私は死ぬ寸前だった。だから、私はこの神様を崇拝している。[Claudia R. Pelaez Farfán, Cusco]

40 ある日、岩に、十字架を担ぐキリストの像が現れた。[Monica A. Echarry Zegarra, Cusco]

41 ある婦人がトラックで旅行していた。車にはワンカの神様の額があった。昔から信者だったのだ。嵐で山崩れが起こり、通行中の車を襲った。そこで、婦人は心をこめて祈ったら、押しつぶされずにすんだ。[Rocio Maribel Cajigas Rojas, Cusco]

六　コイリュリティ

42 あるとき、そのあたりに、一人の羊飼いがいた。羊の番をしていたとき、神父のような恰好をした紳士が現れた。そして、羊飼いにお金を渡し、買いに行かせた。村の人々は「そんなお金をどこから手に入れたんだい？」と、尋ねた。そこで羊飼いは父親に話して、たくさんの人々を集めた。みんなはその場所に行った。着いたときには、みんなは何かを感じた。しかし、遠くから人々を見つけると、何かが岩に隠れた。人々は雪の中を空しく探すだけだった。今日そこは、毎年、コイリュリティ[14]の神様に対する信心と愛情をもってお祝いをしている場所だ。[Zenón Giraldo, Urubamba]

43 コイリュリティの神様は一人の羊飼いの前に人の姿に

なって現れた。二人はビー玉遊びをしたものだが、午後になると神様は岩の中に姿を消した。こうして、コイリュリティの神様は発見された。[Artemio Marcavillaca Castro, Urquillos-Huayllabamba]

44 アルパカを放牧する一人の若者がいた、という。マワヤニ[15]の若者はいつもマワヤニ山で放牧していた。一人の若者が現れ、彼の親友になった。二人はビー玉遊びをして、お腹が減ることもなかった。父親と村長が見に行ってみると、コイリュリティの神様だった。見ると、神様は姿を消した。[Encarnación Mormontoy López, Huayllabamba]

【写真8】巡礼地コイリュリティ

*ふもとの教会 [IPA]

45 コイリュリティの神様は、一人の男の子が家畜を放牧しているところに行き、近づいて話し掛けた。子供の父親は白い服を着た子供に気がついた。ある日、その子供が誰なのか、と訊き、服の切れ端をもらってくるように言った。新しい服を買ってやるためだった。そして、父親は服の切れ端を持って店々を回ったが、商人たちは、それは神様だけが着るものだ、と言った。ある日、子供が父親と一緒に行くと、白い服の子供はいなくなった。[Eufemio Yupanqui Rodríguez, Huayllabamba]

46 マヌエル[16]という名の男の子がいた。彼は羊を放牧しながら、毎日一人の子供と遊んでいた。ある日、子供に尋ねた。「君の服はどうしてそんなに古いの?見本を頂戴。買ってきてもらうから。」そしてもらってみたが、そのような布は見つからなかった。[Iván Olivera Marcelo, Huayllabamba]

47 羊飼いの子供には親友がいた。ある日、羊飼いはいつものように食べ物を持って行った。もうすぐ着こうとし

たとき、友人のほうを見ると、つまずいた。走っていったが、岩の中に姿を消した。[Victor Terrazas Acurio, Cusco]

48　コイリュリティの神様は六月に祝われる。その月には、ウククが街角に出て、神様のために喜捨をもらいに行く。そして夜どおし歩いていき、背中に氷を担いで帰ってくる。[Olivera Terrazas, Cusco]

49　コイリュリティの神様は、当時子供だった、という。神様は、岩の中の肖像に変化した。しかし、神様であって、コイリュリティの神様と呼ばれた。雪山にいて、そこへ人々が行く。厚く信仰されているからだ。[Veronica Salazar Segovia, Cusco]

50　ある日、あるところに、とても貧しい男の子がいた。遊んだり放牧したりしているときに、もう一人の子供に出会った。とうとう子供は、君のお父さんにクスコまで行ってもらって服の布を買ってもらってきてくれないか、と頼んだ。服の切れ端をくれたので、父親はクスコで探したが、修道院なら見つかるかもしれない、とても上等な布だから、と言われた。修道院へ行ったが、子供の服の切れ端は前日に盗まれたものだ、という。役人たちが子供を捕らえに出かけたが、言われたところに着くと、子供は岩の後ろに隠れた。幼子イエスを描いた像が残されていた。足元に羊飼いは身を投げると、その姿もそこに残された。[Mabel Aucca Vitorino, Cusco]

51　ある村に、貧しい子供のために服を織る一人の男がいた。ある日、一人の男の子が逃げ出し、山の上の十字架になったのを発見された。[John Revollar Astete, Cusco]

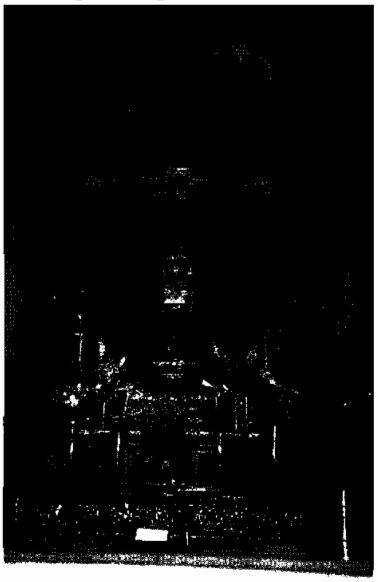
52　コイリュリティの神様は私の母が二度目の妊娠のとき助けてくれた。というのは、妊娠八ヵ月目の時、車が転落したが、流産しなかったからだ。ちょうどこの神様のカルゴをしていたのだった。このことは、その主日の一週間前のことだった。[Bertha A. Valdez Riuelme, Cusco]

七　地震の神様

53　あるとき、一人のモレーノ［肌が黒い人］が、壁に十字架を描いた。地震が起きたときに人々がその聖像を持ち出すと、地震がおさまった。そこで、地震の神様[17]と呼ばれるようになった。[Washington Zarate R., Cusco]

54　スペインから地震の神様の十字架が送られてきた。一六五〇年の地震によりその名がついた。大聖堂の奥から

【写真9】地震の神様



*クスコ大聖堂

持ち出されて行列が行われた。行列のあとに地震が鎮まったのだ。そこで、多くの奇跡を起こしたとされ、クスコの守護者となった。[José J. Barra Ladrón de Guevara, Cusco]

55 一人の喉の乾いた男が現れたという。誰も何もくれなかったので、男は言った。何もくれないのなら、地震を起こしてやるぞ、と。[Mario Aguilara Ascue, Cusco]

56 壊れたり古くなったりした聖像のための場所に置かれたある聖像の話である。クスコで大地震が起こったとき、祭壇にそれを置いたら、地震が止まった。[Cesar Medina, Cusco]

57 あるときクスコ市で地震があった。濃い肌の男は地震の神様の十字架を描いた。地震のときに人々がその像を持ち出すと、地震は止まった。そして地震の神様のようなイメージが刻み込まれた。それ以来、みんながたいへん信仰するようになった。[Yoraina Alzamora Pacheco, Cusco]

58 イエスが死んだから聖週間と呼ばれる。十字架にかけられたので、聖月曜日と呼ばれる。地震の神様と呼ばれるのは、とても強い地震があったときに、地震の神様に祈ると、無事だったからである。[Ana L. Ramirez Aragón]

59 あるとき、ここクスコでとても強い地震があり、たまたま、アルマス広場にある像を持ちだし、広場を何周かすると、強い風がおこり、地震は鎮まった。[Sonia Zamalloa C., Cusco]

60 一人の黒人が地震の神様の壁に十字架を描いた。地震のときにみんな倒壊したのに、その十字架だけは助かった。[Juan de Ochoa E., Cusco]

61 一九五〇年の大地震[18]では人々が地震の神様を持ち出すと、地震がおさまった、という。[Alvaro Zamora Bornás, Cusco]

八　奇跡の神様

62　リマの郊外で異教徒として生活していた人々の話である。一人が友人の手助けでこの生活を変えようと、思い立って、壁に十字架を描いた。そこで神様が見つかることとなる。彼はしばらくは態度を変えたものの、やがて再び悪に染まり、その場所からも姿を消した。当時リマで地震が起こり、すべてが破壊され、死傷者が出た。しかし、例の絵が描かれた場所に隠れた者もあった。彼らは無事で、信仰を抱くようになった。再び地震が起こり、すべての建物が破壊されたが、その場所はまったく無傷だった。その場所に隠れた人々もまったく無事だった。三度目の地震ですべてが破壊されたときも、そこだけは無事だった。描かれた壁はびくともしなかった。パチャカミーヤ[19]の神様だ。[Emperatriz Alvarez Frisancho, Urubamba]

63　パチャカミーヤの十字架、奇跡の神様は、一人の奴隷が描いたものだ。リマで起こった地震でも倒れなかったので、それ以来、リマとアメリカの守護者となった。[Eloy Paúl Dorado Valencia, Huayllabamba]

64　奇跡の神様（パチャカマク）は、ある壁の中の十字架にイエスの姿となって現れた。黒人奴隷たちがそれを見た。それ以来、奇跡の神様と呼ばれる。[José Dario Morales Aragón, Cusco]

65　スペイン人たちは船でやってきた。一人のモレーノが乗っていた。津波があったが、彼のおかげで助かった。その日以来、奇跡の神様の名が生まれた。[Jhon E. Jorge, Cusco]

66　奴隷たちが壁に絵を描いたという。地震があったときも、倒れなかったので、その日以来、崇拝されるようになった。[Hamilton C. Caceres, Cusco]

九　その他の物語

67　ウルコスのある神父には、ドラッグにおぼれた甥がいた。彼は甥の中に悪魔が入り込んだと考えた。ある夜、神父は甥が死にかけている夢を見た。毎晩、違う夢を見た。神父は甥にミサに行くように仕向けた。が、効果はなかった。そこで、ある日、神父は十字架を持って出かけ、ウルコスの湖の中に身を沈めた。あるとき、十字架

が浮かんでいるのを一人の漁師が発見した。あなたが一二時のような夜中に出かけたら、神父の嘆願の声が聞こえてくる、といわれる。[Angela Giuliana Peláez Vizcarra, Cusco]

68 私たちの家族は、モロパタと私たちが呼んでいる十字架のお祭りをします。この十字架は、私たちが所有していたアシエンダから来ました。最初のうち、十字架は全然重くなかったのですが、来たくなかったようで、途中で、担げなくなりました。だんだんと重くなってきたからです。[Yael M. Rodríguez Bedregal, Cusco]

69 商人の家族だった。父親は川に身を投げた。その妻は石の十字架をずっと前に作った。その十字架はアルムデナにずっとある。[Orelia Vargas C., Cusco]

70 ギリェン家の聖なる十字架は、私や家族も信仰しているものである。この十字架は今年、私の家にあり、来年にはこの十字架を信仰している他の家に行くだろう。[Angel O. S. Cevallos, Cusco]

71 クルスベラクイは、毎年五月三日に祝われる。一晩中、すべての十字架にロウソクをあげておくのだ。サンフランシスコ教会には一本の十字架があり、信者たちがサクサイワマン[20]まで運んでいく。彼らは歌いつづけ、ロウソクを手に、道すがら祈りつづける。[Yanet Huanca, Cusco]

72 教会の壁を通り抜けたウラカ神父の十字架。死ぬときはとても奇跡的だった。そこで、リマとクスコのメルセー教会にはウラカ神父を表徴する十字架がある。それで、心臓の形をしたいろんな銀製のお供えがされる。一つ一つの心臓がそれぞれ奇跡を表徴している。[Greylin Cruz Muñiz, Cusco]

73 クルスベラクイは一種の行列であり、全員が十字架を拝みに出てきて、いくつもの通りを通らせる。[José Guzman D., Cusco]

74 クルスベラクイは一種の行列であり、地震の神様もそうである。人々は十字架を拝みに出てきて、大通りを歩いていく。[Mariela Teseira Cabrera, Cusco]

75 ずっと前にサクサイワマンで聞いた話では、白いキリスト像の横にある三本の十字架の由来は、そこで悪魔たちが踊っていたからだ。[Fiorelus Garrafa del Castillo, Cusco]

76 十字架は苦しみだ、という。一人の女性は十字架の夢を見たら、夫が死んだ。だから、十字架は苦しみと奇跡の両方だ、という。[Rina Vargas Uscamayta, Cusco]

77 私の家族（アクリオ家）の十字架は五月に祝われる。[Milagros Tatiana Bustamante Acurio, Cusco]

78 ワイナロケについて。アンデスの貧民たちが十字架を見た。すると、竜巻のような風が吹いてきて、十字架を持ち去った。彼らは立ち去り、翌日戻ってみると、そこに十字架があった。イエスの顔が浮き出ていた。[Danilo Chalco B., Cusco]

79 一人の男の子が畑の中を走り回っていた、という。彼の足にとげが刺さった。そこには、椅子に腰掛け、泣きながら、とげを抜いている男の子の姿があった。[Carlo Armendia Wilson, Cusco]

80 イエスがなくなった十字架について話してくれた。一人の失明者がこの十字架に触れると、そのとたん目が見えるようになった。[Edward Sanchez Rozas, Cusco]

81 あるとき、一人の少年が山から落ちたが、遺体は見つからなかった、という。埋葬することも出来なかったので、おおよその場所に十字架を立て、いつも掃除をしたり、飾ったり、花でいっぱいにしたりした。[Alexei Castro Chevarría]

82 昔、一人の農園主がいた。そこで、サンイシドロ神[21]が労働者として働いていた。二頭の白い牡牛と土地を掘り起こしてはコムギとトウモロコシを蒔いた。サンイシドロ神は毎日ミサに行った。農園主は、ちゃんと働いているかどうか、見に行った。遠目には三頭の白い牡牛が見えた。畑についてみると、サンイシドロ神が二頭の牡牛とトウモロコシを蒔いていた。一週間後、稔り、農園主はコムギを収穫させた。ユダヤ人たちが、その男は泥棒だ、呪術師だ、と言って、神を捜していた。神を見つけ出すと、殺して穴に埋めた。穴の入口には丸い石を置いた。神を殺しておきながら、ロウソクを上げ、埋葬した

【写真10】サンイシドロ像

*肩に鋤をかついでいる

のだ。あの呪術師はもう死んだ、今度は家畜を殺して食べなければならない、と言った。ウサギや牛や鶏やアヒルや豚などの家畜を殺した。ところが、殺したはずの家畜や、鍋や竈で料理されていた家畜が立ち上がるのを見た。叫びながら飛び出してきた。そして鐘が三度鳴った。本当に神だったことを知ったのだ。みんな家から飛び出してきて、何が起こったのだ、と叫んだ。神を埋めたところに行って見ると、シーツが残っているだけだった。空を見上げると、神が飛んでいた。ようやく、神だった、と信じた。[Victoria Cruz Quispe, Ollantaytambo]

83 ムルアイの神様。刑務所で地震が起こったときから、この神様は信仰されるようになった。一人の囚人が壁に神様の像を描くと、揺れ始め、その描かれた壁以外はみんな崩壊した。そのときから、みんなこれを信仰するようになった。たくさんの奇跡を起こし、人々を助けてきたからだ。[Juana Roque Ferro, Ollantaytambo]

84 最初の聖体拝領のときに、私はキリストが磔刑されている十字架のついたロサリオをもらった。[Mickael B. Mendoza, Cusco]

85 ある村で泥棒たちが十字架を盗んだが、悔恨のあまり、運べなかった。そこで、元に戻した。[Fernando Quiroga Ascue, Cusco]

86 ウルコスで、一人の神父が、自分の甥を助けようとして、キリストのように十字架を担ぎ、湖に身を沈め、死んだ。十字架だけは浮かんできたが、神父はみつからなかった。[Yuli Martiarena López, Cusco]

十　ヨーロッパ起源の物語

87 ローマでコンスタンティヌス帝に起こった十字架の話。彼は信じていなかったが、空に十字架と、この象徴が意味する碑文を見た。[Janet Gutiérrez Sulca, Cusco]

88 わが主イエス・キリストは、十字架の形をした木の上で死んだ。彼は、重たい木の十字架を背中に担いでいった。ローマ人たちは、道すがら鞭打ったが、イエスは一人ではなかった。傍らには、一人の盗賊と一人の信者が同行した。彼らももっと小さな十字架を背負い、手足は釘付けにされて、十字架の形のまま死んだ。が、イエスは復活した。こうして、イエス・キリストは生まれた。キリストは十字架から来たのだ。[Melissa A. Ambia Agreda,

Cusco]

89　この悪い泥棒がイエスに言った。自分や彼らを助けてくれ、おまえは神の子なのだから。しかし、イエスは聞き入れず、天を見て言った。父よ、お赦しください。彼らは何をしたのかも知らないのですから。それからイエスは水を所望したが、アルコールを浸したスポンジが投げつけられた。それから、茨の冠をかぶせられた。彼らは、イエスが苦しみながら死んでいくのを眺めていた。すると、大地震が始まった。神によって起こされたものだった。[Holger Mario Vielo Briduo, Cusco]

90　マルセリーノのパンとブドウ酒[22]について。ある日、マルセリーノは修道院の門に捨てられた。翌日、神父が見つけ、食べ物をあげた。そして、木の階段には上ってはならない、と禁じた。しかし、マルセリーノは従わずに上った。扉を開けると、十字架上のキリストがいた。キリストが話しかけ、その日以来、マルセリーノは食べ物をあげるようになった。[José Carlos Angulo C., Cusco]

91　マルセリーノは孤児で、とてもいたずらな少年だった。ある日、修道院の屋上に上り、十字架上のキリストに会った。少年は恐ろしかったが、キリストと話した。すると、キリストが十字架から降りてきた。マルセリーノが一つのお願いをしたからだ。それは母親に会うことだった。イエスはその望みをかなえてやった。[Lita del Pozo A., Cusco]

92　マルセリーノのパンとブドウ酒。お母さんがなかった少年の話。彼は無邪気で、十字架上のイエスと話した。イエスが何者なのかも知らなかった。イエスは十字架から降りてきて、少年はイエスの腕の中で眠り、そのまま死んでいった。[Natalia Estrada Herrera, Cusco]

注

（1）I・シルバーブラット、染田秀藤訳『月と太陽と魔女――ジェンダーによるアンデス世界の統合と支配――』（岩波書店、二〇〇一年）

（2）青木芳夫「ペルー・アンデス南部村落における十字架をめぐる二つの祭り」『奈良大学紀要』第二五号（一九九七年）、三五―三九ページ。

（3）Yoshio Aoki & Angélica Palomino de Aoki, "Historia oral de cruces en Cusco-Perú"『奈良大学紀要』第二四号（一九九六年）

（4）クスコ県ウルバンバ町にあり、十字架そのものを本尊とする礼拝堂。警官やトラック運転手から篤い信仰を集めて

いる。

(5) ケチュア語で、「泥の玄関」の意味。ウルバンバはトゥルバンバともいい、その玄関口にあたるところからくる呼び名と思われる。

(6) 学名 polylepis spp。アンデス高地土着の潅木。岩地の斜面でも生育する。建築用材や薪、皮なめし用のタンニンの抽出に利用されるが、乱伐にあった。

(7) ユカイ村の七つの十字架のうちの一つで、最も新しい。「悪魔」が騒いで岩や石を落とし、歩行者を妨げるから、十字架が立てられた、という伝承がある。

なお、ユカイ村では、五月三日に加え、五月下旬の「聖霊降臨節」にあわせて十字架の祭りが催され、その最終日に、七対の十字架の片方がそれぞれの山の上の祠へと帰っていく。再び村に下りてくるのは新年のときとなる。

(8) カルバリオとは、キリストが処刑されたゴルゴダの丘の別名である。

(9) 五月三日はキリスト教暦で「真の十字架発見記念日」にあたり、ペルー・アンデス各地では「クルスベラクイ」という十字架の祭りが催される。また、七月一六日はキリスト教暦で「聖母カルメン」の日、七月二八日はペルーの独立記念日である。

(10) 六月二四日は、キリスト教暦では「聖フアン・バウティスタ」の日にあたり、ペルー・アンデスでは「農民の日」という祝日（半日）になっている。

【図版】十字架に奉納されるハサミ踊り（アヤクーチョ地方）

*ジグソー・パズル、フチュイ・ルナ（クスコ市）作

ちなみに、クスコ市ではこの日に「インティ・ライミ」つまり太陽の祭りが催される。

(11) クスコ市にある十字架で、伝承どおり、もともと自然木であった。教会側との間に激しい係争が起こった十字架の一つである。加藤隆浩が調査している。

(12) クスコ市内にある十字架の一つである。ウルバンバからクスコ市へバスでやってくると、最初に降りる高台のところにある十字架。

十字架の祭りは、もともとは農村部における慣習であったが、特に一九五〇年代から周辺農村からクスコ市へ先住民系の人々が移住してくるようになると、十字架や十字架の祭り（五月三日のクルスベラクイ）もクスコ市に定着するようになり、現在では一般市民にも歓迎される行事とな

っている。

(13) ワンカは、クスコ市からも日帰りで行ける代表的な巡礼地の一つであり、パチャトゥサン山の近郊にある。各地からの巡礼団が残した十字架が目を引く。

また、「悪魔の泉」と「天使の泉」でも有名である。クスコ地方の代表的なオーラル・ヒストリーの『グレゴリオ・コンドリ・ママーニ自伝』では、なけなしのロバを死なせた主人公は、ワンカで知らずに「悪魔の泉」の水を飲ませてしまったのだ、と自らを慰めた。なお、ワンカの奇跡の伝承は、下記の文献に載っている。細谷広美『アンデスの宗教世界』(明石書店、一九九七年)一二七ページ。

(14) ペルー・アンデス最大の巡礼地。アウサンガテ山に近いシナハラ山の麓にある。コイリュリティとは、ケチュア語で、星と雪を意味する。星は富を、雪は健康を、それぞれ表徴する。毎年、五月下旬から六月上旬にかけて、ちょうどキリスト教暦のコルプス・クリスティのころに、十字架の祭りが催される。麓の教会から山頂までウククと呼ばれる熊の衣裳をかぶった男たちが十字架を運び、儀礼を執り行なった後、再び降りてくる。ここの奇跡の伝承は、下記の文献に載っている。細谷、前掲書、一一九-一二〇ページ。

(15) 十字架の祭りのときには、車は祭りの参加者や観客をここまで運んでくれる。

(16) 先住民の子供のほうがマリアノ・マイタで、マヌエルはコイリュリティの神様のほうの名前のようだ。細谷、前掲書、一一九ページ。

(17) 現在は、クスコ市の大聖堂に鎮座している。肌の黒いキリスト磔像である。

(18) 一九五〇年の大地震によってクスコ市は大きな被害を受けた。そのご、大規模なクスコ市再建事業が展開された。それを契機に、建設労働者として周辺農村から移動してきた人々がクスコ市に残留し、クスコ市の膨張をもたらすことになった。

また、サントドミンゴ修道院の被害跡からはインカ期の石組みが露出した。これがコリカンチャ(黄金神殿)であり、今日世界遺産(クスコ市街)に指定されている。

(19) パチャカミーヤとは、パチャカマックのスペイン語的な呼び方。パチャとは、ケチュア語で世界や大地の意味。パチャカマックは、「世界の創造主」という意味になる。この奇跡の神様のキリスト像は、リマの大聖堂に安置されている。なお、リマ市近郊には、同名の有名な遺跡がある。

(20) サクサイワマンはクスコ市郊外にある遺跡で、インカ期の代表的な石組みである。クスコ市はピューマの形に建設された計画都市であり、サクサイワマンはちょうどピューマの頭部にあたる。軍事要塞とも言われたが、今日では宗教施設だった、という説が有力である。今日そこには、白いキリスト像と三本の大きな十字架がある。ローマ教皇がペルーを来訪した折には、ここでミサが行われた。

なお、サンフランシスコ教会はクスコ市の中心部にあり、そこからサクサイワマンまで人々が十字架を掲げながら行列していったり、クスコ市内各地からたくさんの十字架が行列したりするクルスベラクイは、今日一大スペクタクルとなっている。

(21) サンイシドロ（聖イシドロ）は耕作者の守護聖人であり、五月一五日に祝われる。クスコ地方はこの頃、ちょうどトウモロコシの収穫が終わる時期であり、その祭りには一種収穫祭の趣きがある。二頭の牡牛に犂を引かせ、種を蒔く所作をする。そのあとを子供たちが追いかける姿が見られる。

(22) スペインの児童文学作家 J. M. Sánchez-Silvaが一九五三年に作った小説。諸言語に翻訳されている。